

わが生涯の物語

クラレンス・ダロウ

訳：柴 嵩 雅 子*

The Story of My Life

Clarence Darrow

Translated by Masako Shibasaki*

<訳者解題>

本稿は、アメリカの伝説的な弁護士、クラレンス・ダロウ（1857年～1938年）の自叙伝、『わが生涯の物語（*The Story of My Life*）』（1932年）のうち、ローブ・レオポルド事件に関わる第27章と第28章を翻訳したものである。社会的弱者の味方となり、「断罪を受けた者たちの弁護士」と呼ばれたダロウは、その巧みな弁論だけでなく、徹底した死刑反対論でも名高い。ローブ・レオポルド事件は、1924年にローブとレオポルドという裕福な家の少年二人が、完全犯罪を夢見て、別の少年を誘拐し殺害したもので、二人の死刑を求める声が強い中、ダロウは持ち前の雄弁を生かして終身刑を勝ち取った。犯罪に対する厳罰化が進み、国連の決議に反して死刑を執行し続けている日本では、ダロウの主張はなお大きな意味を持つと思われる。

なお本文中の〔 〕は訳者による注である。

キーワード

死刑、青少年犯罪、リチャード・ローブ、ネイサン・レオポルド

*ローブとレオポルドの悲劇

1924年の夏、私はシカゴのローブ・レオポルド事件の弁護依頼を受けた。アメリカのみならず世界的に見ても、あれほど大々的に報道され、議論された事件は珍しい。17歳のリチャード・ローブと18歳のネイサン・レオポルドという二人の少年が殺人容疑で起訴されたのだ。二人の親はともに資産家で、シカゴやその他の地域でも名を知られ、非常に尊敬されていた。

事件の発端は、14歳の少年、ロバート・フランクスが下校時に行方不明になったことで

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2008.12.7受理〉

ある。夜になっても帰ってこないで、両親はとても心配した。翌日、父親は、ロバートは無事だ、身代金1万ドルを払えば帰ってくるという手紙を受け取った。そこには身代金の支払方法も事細かに記されていた。父親のフランクス氏が金を袋に入れ、その日の午後4時頃にシカゴを出発する電車の後部乗降口に立ち、エングルウッド南部の大穀物倉庫近くの人気のない場所で金を投げ落とすよう、指示されていたのである。フランクス氏が銀行で金を調達してから電車に向かっていたとき、シカゴ市の南20マイルほどの所にある踏切下の暗渠で、全裸の少年の死体が発見されたというニュースが午後の新聞に印刷されていた。どう見ても、それはロバート・フランクスと思われた。少年の遺体発見という情報が電話でフランクス宅に伝えられ、父親は哀れなその少年は息子に違いないと思った。そして事実その通りだった。

ローブとレオポルドは、草原の中の身代金の受け渡し場所に行く前に新聞記事を見たため、当然のことながら金を取りには行かなかった。警察はすぐに捜査を開始した。数日のうちに何人かの容疑者が捕えられ、殺人事件ではいつもそうだが、厳しい尋問が行われた。そのうちの二、三人は犯罪とは全く関係がなかったにもかかわらず、ひどく評判を落として名誉を傷つけられ、失った地位は二度と回復できなかった。

少年の遺体が発見された現場付近を捜索したところ、眼鏡が見つかり、それを売った眼鏡屋が探し出された。眼鏡屋によると、このタイプの眼鏡を買ったのは二人きりで、一人は目下ヨーロッパにいるため犯罪には関係しようがなく、もう一人はネイサン・レオポルドという名の若者だった。レオポルドの家はフランクスの住まいに近く、両家とローブ家は長年にわたり親しく近所付き合いをしていた。ネイサン・レオポルドはシカゴ大学を卒業した後、同じ大学の法科大学院に進み、当時は2年生で、数日後にはヨーロッパに旅立つことになっていた。この旅行は随分前から計画されており、夏期休暇のために父親から小遣いをもらっていたので、チケットも購入済だった。

眼鏡を買っていたネイサン・レオポルドが、事件のあった夜どこにいたのかを尋ねるため、州検事は彼のところに人を送った。レオポルドはすべての質問に答え、その夜、自分の車でローブといっしょにシカゴ周辺の公園や田舎をドライブしていたと語った。州検事局でもほかのどこでも、レオポルドが事件に関与しているとは誰一人として想像すらしていなかったが、念のためにネイサンを短期間、勾留するのが一番良いと思われた。ネイサンは同意する前に、父親とベンジャミン・バカラック氏に相談したが、この二人は彼が事件に関与した可能性など全然考えもしていなかった。

翌日、何人かの警官がリチャード・ローブのところにやって来て、あの夜について尋ねると、「どこにいたか、はっきり覚えていませんが、ネイサンと一緒にドライブに行っていたと思います。でも行き先は覚えていません」と答えた。二人の少年は、もし何か起きて事件後一週間以内に逮捕されたら、あらかじめ作り上げていたストーリーを話し、一週間以上たってから捕まったなら、どこへドライブに行ったかは覚えていないと言おうと示し合っていたようだ。運悪く、レオポルドは一週間たたないうちに逮捕されたので事前に用意したストーリーを語り、ローブは一週間が過ぎてから捕まったのである。それでも警官は、二人の供述のずれを咎めなかった。二人とも家は裕福で、金ならいつもたくさん持

っていたので、あんな事件を起こす動機が思いつかなかったからである。しかしながら、ある警官がレオポルドの運転手を呼んで質問することを思いついた。運転手によると、あの晩、レオポルドの車は使われてはおらず、修理のためにガレージに入れてあった。この証言は容易に裏が取れたので、二人の少年はさらに尋問を受けることになった。一、二日後、彼らは落ちて、ゾットするような事件の詳細を語った。身元が判明しないようにするため、ロバート・フランクスの衣服を剥ぎ取り、その一部はジャクソン・パークの池に沈め、残りは埋めるか燃やした。レオポルドとローブは服を燃やした所を含め、実際に通った全ての場所に連れて行かれた。二人の供述は全部、発見された物によって裏付けられた。

ローブは、誘拐殺人で身代金を得る完全犯罪をやったのけられると信じていたらしい。自分の計画をレオポルドに打ち明けたのは、その実行には手伝ってくれる人が必要だったからだ。レオポルドはこの企みが気に入ったわけではない。しかし彼はローブを崇拜していた。レオポルドはどちらかというと小柄で、運動競技は今ひとつだったが、ローブはがっしりとした体格で野球とフットボールが上手く、みなの人気者だった。二人ともいつもお金は持っていた。ローブは現金2千ドルと多数の未換金の自由公債、さらに父親の事務所の会計係に頼めば、いつでも金をもらえるようになっていた。

計画を練る間、ローブとレオポルドは何度も揉めていた。証拠として提出され新聞に公表された二人の手紙によると、ある時点で両者はあからさまに反目し合い、暴力沙汰になりかけていた。

計画が実際に出来上がると、彼らはレンタカーを借りる手配をした。その際レオポルドは偽名を名乗り、経費を払って車を無事返還する保証人としてローブを挙げていたが、ローブもまた偽名を使い、ホテル・モリソンの滞在客だと称していた。彼はこのホテルの部屋を実際に借りて、旅行用かばんを置いていたが、その中にはたまたまシカゴ大学の図書館から借り出した本が入っていた。

レンタカーを借りる前に、二人は身代金を要求する脅迫状を書いていた。この時点では、どの少年を誘拐し、どこに手紙を送るかを全く決めていなかったため、宛名は書かれていない。

ある日の午後4時頃、二人は車に乗り込み、ローブの家があるシカゴで有数の高級住宅街に沿って二、三ブロック、ドライブし、ローブがかつて通っていた私立学校に着いた。ちょうど午後の授業が終わったところで、男子生徒たちが出て来ていた。その一人一人を二人が車から探っていると、ロバート・フランク스가見えた。彼はドライブに誘われ、運転していたレオポルドの横の助手席に座った。十分もしないうちに、フランクスはローブに頭をのみで殴られて気絶し、間もなく出血多量で死んだ。これら全てが、シカゴでも人口の密集した地域で、しかもこれら三人の少年の自宅付近で起きたのである。

それから車は大通りから市の南部をゆっくり20マイルほど進んだが、そこは市街地で、あちこちに向かう車で混雑していた。夏季だったので昼の時間が長く、夜の始まりは遅い。レオポルドは植物学を研究しており、鳥類の愛好家でもあったので、花を摘んだり鳥を捕えるために、家から離れたこの地域に何度も来たことがあった。彼は珍しいコレクションを持っていて、自分で博物館を設立していた。きわめて巧みに鳥の剥製を作り、その多く

は非常に貴重なものだった。そうした遠出の折に辺鄙な場所に精通するようになり、踏切下に暗渠があることを知った。めったに人が訪れない道を通らないと、そこには近づけない。ローブとレオポルドが暗渠の近くにまで来たとき、まだ太陽は沈みきっていないので、もう一、二時間ドライブして、夕暮れが漆黒の闇に変わるのを待ち、それからフランクスを暗渠に置き去りにして車で帰った。

二人は都心に戻ると脅迫状を取り出し、郊外に放置してきた少年の父親に宛てて、「ジェイコブ・フランクス様」と書いた。それからレストランへ行ってたっぷり食事を取り、レオポルドの家へと車を走らせた。その邸宅は落ち着いた街区にあり、隣は大きなアパートである。車内で少年を殺したため、レンタカーは中だけでなく外面も血まみれだった。二人は車を家の前の通りに止めたまま、レオポルドの部屋に上がりこんで、その日の出来事をずっと話し合った。ローブが自宅へ帰ったのは、夜も更けてからである。

殺害の翌朝、ローブは再びレオポルドの家へやって来た。二人は車をガレージに入れて洗い、車が乾くと、レオポルドがレンタカーの営業所に返しに行った。しかし証拠となったその車には、血痕が残っていたのである。

たいていの人は理解できず、おそらく信じないことは承知しているが、ローブは温厚な人なつこい少年である。ダニエル・ウェブスター〔Daniel Webster, 1782年～1852年。アメリカ合衆国の法律家、政治家〕が殺人事件の陪審員に向かって語ったことを覚えている人もいるだろう。彼は被告を描写し、その低い額、残忍な眼差し、そのあらゆる特徴からして、悪魔の化身だと決めつけたのである。ウェブスターの馬鹿げた言い分が正しいのなら、被告はどこに行こうと人殺しだと分かるはずだ。ウェブスターのこの長い非難の弁論の一部はかつて学校の読本に入っていて、私たち生徒は学期末の日にそれを「演説した」ものだ。私たちは、なぜ主はカインの額にわざわざ印を付けられたのか、疑問に思っていた。というのもウェブスターの秘訣によると、殺人者は皆、外見で分かるようなので、通りに出ればどこでも人殺しを見分けられるはずだからである。ダニエル・ウェブスターは心理学者ではなかった。彼は政治家かつ雄弁家であり、一人の人間としてはそれだけで充分なのである。

「ディッキー」という愛称で呼ばれていたローブは、見かけだけでなく実際に思いやりのある少年である。どんなに忙しいときでも、たまたま知り合った人にさえ親身になって尽くした。今回のように運悪く奇妙な事情が重なることは千年たっても再来しないだろうから、彼を一生、刑務所に閉じ込めるべき理由はない。

私たちが犯罪と呼ぶような事柄に向かうような素質は、レオポルドには少しもない。彼は私がこれまで出会った少年の中で、最も素晴らしい知性の持ち主である。十八歳ですでに十ヶ国語ほど操り、植物学について高度の研究を行い、鳥類の専門家で、良書を楽しんでいる。研究会などの集まりで講演するよう依頼されたこともしばしばだった。彼は陽気で優しく、人に好かれていた。父親は裕福で、息子を大変自慢にしていた。才能豊かなこの青年は将来、並外れた仕事を成し遂げるだろうと、誰もが思っていた。親友の病んだ脳が考案したこの上なく馬鹿げた全く動機のない行為のせいで、彼は終身刑を科せられてしまったのである。

あの運命的な日が来るまで、レオポルドはロバート・フランクスにほとんど会ったことがなかった。ローブはフランクスとテニスをしていて、とても仲が良かった。では一体なぜローブとレオポルドは、この軽率で恐ろしい犯罪を仕出かしたのだろうか。この事件や二人のことを調べた人と同じく、本人たちも理由は分かっていないと思う。人間には理解できないことが沢山ある。人間はわけの分からない問題に突き当たって混乱させられるものだが、そうした問題の中でも最も不可解なのは人間の心である。人生の最終結果は、誰にも予測がつかない。それをオスカー・ワイルドは、こう表現している [『レディング牢獄の唄 (The Ballad of Reading Gaol)』 (1898年) より]。

「というのも、いかなる赤熱の地獄に
彼の盲いた魂が迷い込むか、誰にも分からないからだ。」

おぞましい行為が犯され、二人の少年は絞首刑を受ける恐れがあった。彼らは自白し、家族は絶望に沈み、すでに雇っていた弁護士たちを手伝うよう私に依頼に来た。私の心はひどく乱れた。手を貸したかったが、同時にこの事件に関わりたくなかったのである。衝撃的で奇怪な犯行だったので、世間や新聞はほぼ例外なく二人を敵視した。

大変な危機に見舞われたとき、貧乏人よりも無力な人がある。それは金持ちだ。当時から分かっていたことだが、少年たちの家族が裕福でさえなかったら、有罪を認めて終身刑になることは、異論なく受け入れられていただろう。しかしそうは行かず、戦うのは気が進まなかった。

私に弁護を依頼した人は、これまで誰も死刑になっていない。万一そんなことが起きたら、それこそ死ぬような思いをするだろう。私はこれまで処刑の話を読めたためしがない。死刑執行がある日はいつも、できるだけ町にいないようにしてきた。私は強く——「病的なほど」と呼んでもらっても構わないが——殺人に反対している。ローブとレオポルドの弁護を引き受けたら、相当の報酬が得られるだろうと思っていた。しかし仕事を引き受けるか否かを、金に左右されて決めたことは一度もない。今回、断るよい理由は見当たらなかったが、私も68歳で、くたびれていた。世論という最も強大な敵に、徒手空拳で立ち向かうのに疲れていたのである。

しかし、私は引き受けることにした。お決まりのように「正義」の名をかざした憎悪と悪意の波から正気と人間性を守るために、できるだけのことをしたかったからだ。

*ローブとレオポルドの裁判

私たち、ローブとレオポルドの弁護団は、充分時間をかけて準備することは不可能だと分かっていた。刑事裁判所について何も知らない人は、時間がかかりすぎるといつも非難する。実は世間が被告に対して激しい怒りを見せている場合、裁判所では他の雑事はすべて後回しになり、刑事訴追にかかりっきりになる。人々の憎しみが煮えたぎっている間に、裁判は一挙に行なわねばならないのである。

私たちは何かとイギリス人やイギリスのやり方を参考にするよう言われる。しかしイギ

リスの新聞は、犯罪の詳細を掲載したり容疑者に言及したり、そのほか被告に対する群衆の怒りを掻き立てるようなことは許されていない。アメリカでは世間が関心を寄せる事件の場合、被告人に対し悪意に満ちたキャンペーンがすぐに開始される。インタビューや写真が毎日、新聞に載る。容疑者が言ったとされるのが、裁判が始まる前に、あちこちに太字で書かれる。家族は付け回されてコメントを強要される。近所の人やただの知り合いまでもインタビューされ、尾ひれが付いた話はどんどんおぞましくなっていく。新聞の売り上げは信じられないほど上昇する。世間が興味を持ち続けるよう、来る日も来る日も苦勞して新しいニュースを仕入れる。陪審員になるかもしれない人は皆、新聞の報道によって事件の詳細を知っている。そのような人は特定の見方に凝り固まっており、被告人に公平な裁判を提供することは不可能だ。すでに意見を持っているため、陪審員候補は次々に不選任となる。すると被告弁護団は、時間を引き延ばしていると激しく非難される。まるで弁護団も、検察局や群衆と一緒に、被告が絞首刑になることを助けろと言わんばかりだ。それなら法律を変えなければならない。議会のメンバーは政治家で、彼らにとって人々の声は神の声なのだから、たとえすでに意見を持っていたとしても、それを無視できると言う人は陪審員になれることを認める新しい法律を可決しなければならない。

自分の見解を無視することがどれほど稀か、ものを考える人なら誰でも知っている。いずれにせよ、たいいていの人は一つか二つの考えしか持っておらず、それに死に物狂いでしがみつく。政治や宗教やその他の問題に関する自らの信念が、自分がやりたい何かと齟齬をきたしたとき、どれだけの人が信念を無視するだろう。証拠もなしに意見を無視することは心理的に不可能だけでなく、物理的にも不合理だ。これは、たまたま裁判関係の事柄に個人的な利害関心を持てば、誰でも痛感することだ。刑事であれ民事であれ、あらゆる質問や論点について、判事はどのような態度をとるか、判事の心はどのような影響を受けるかを熟考し、陪審員についても同様に配慮するものだ。いかに注意しようと、被告が公平な審理を受けるのはきわめて困難である。

今回の事件の扱いが異例であることは承知していた。皆が皆、判決をもう決めてしまっていたのである。当然のことながら、私たちは裁判をできるだけ遅らせたかった。裁判の準備のために時間が必要だったこともあるが、それ以上に人々の熱を少しでも冷ます期間が欲しかったのである。少年たちの精神状態以外に、弁護のしようがないことは分かっていた。イリノイの州法では、第一級殺人は死刑ないし懲役14年以上となっている。けれども今日に至るまで、殺人事件となると、懲役刑など論外であるかのような話になってしまう。私たちは最初から、とにかく二人の被告の命を救うことだけを目標として努力した。心神喪失を主張したり証明しようとさえしなかった。彼らの精神はずっと正常ではなかったと信じていたし、それを示そうと努めた。

イリノイの州法では、被告が有罪を認めると、法廷が量刑判断のために証言を聞くことができる。およそ文明国の判事なら誰でも、刑罰の重さを自ら判断しなければならないとき、量刑に関わる証言を聞かずに済ますことはないと思う。そうした法律があろうとなかろうと、法廷は判決を下す前に被告人に関してできることをいつも見つけ出すものである。

まだ弁護士が雇われる前に、イリノイ州の検察当局はすでにシカゴ最高の精神鑑定医を呼び入れていた。そのため私たちは、被告の検査をしてくれる精神鑑定医を州外で見つけなければならなくなった。その頃、全米精神医学協会の学会が、アトランティックシティ〔ニュージャージー州の都市〕で開催されていた。私たちは二人の少年を調べてくれる高名な精神科医を三、四人、確保するために、弁護団の一人、ヴァルター・バカラック氏をすぐさま会場に派遣した。これは絶対に必要なことだった。こうしてウィリアム・アランソン・ホワイト博士、ウィリアム・ヒーリー博士、バーナード・グルック博士が鑑定に来てくれることになった。

ホワイト博士はワシントンにある合衆国精神病院の院長を長年務めており、わが国の卓越した権威と見なされてきた。彼は精神異常と人間の精神一般についてアメリカでもっとも多く著書を物している。ウィリアム・ヒーリー博士はボストンのペイカー財団の精神科医である。この財団は博愛主義者の知的な判事が、ボストンの少年裁判所に連れて来られた非行少年を検査し報告するために組織されたものである。何年も前にシカゴで少年裁判所を設立した際、ヒーリー博士は手助けしてくれた。また長い間、管区内の非行少年の検査を担当していた。彼はこうした分野について広範な著述を行っており、世界中で尊敬されている。バーナード・グルック博士は長年にわたりニューヨーク州で指名される精神鑑定の専門家で、州刑務所の囚人の検査について監督責任を負っていた。彼は疑問の余地なく、アメリカでトップレベルの精神鑑定医と見なされていた。

以上3名の医師とボストンのボウエン博士、シカゴの若くて有能な精神鑑定医のハールバート博士が、シカゴに集まった。ボウエン博士は内分泌腺独特の機能を専門とする研究者だが、内分泌腺は人間の行動に関して重要な役割を果たしていると現在では一般に考えられている。私たちがこの事件に関与し始めてから精神鑑定が法廷で争われるまで、一週間しか確保できなかった。

ロープとレオポルドの起訴項目は、二つあった。殺人と誘拐である。数年前、イリノイ州の児童誘拐事件が大きな注目を集めて憤激と議論を呼び、その折に群衆の要求に従って、州議会は誘拐にも殺人と同じ刑罰を科す法律を成立させた。もし人々がわずかの常識でも働かせていれば、そんな法律を作れば、誘拐犯は人を殺して逮捕されても刑罰は増えないのだから、証拠を消すために被害者を殺してしまうと予測できただろう。しかし世間の人も議員も、そこまで考えが及ばなかったのである。

二人の少年に対する起訴状が裁判所に提出され、自動的に当時の主任判事だったジョン・ケイヴァリー氏が審理を担当することになった。私たちはかなりの時間をかけて、弁護方針について協議した。事件が起きてまだ日が浅く、人々の気持ちがおさまっていないので、陪審に任せれば少年たちの命は救えないだろうと感じていた。この事件について新聞を読んだことがなく、特定の意見を作り上げていない人を見つけることなど、全く不可能に思えた。ケイヴァリー判事はかつて市裁判所の判事をしていて、少年裁判所の設立を援助したこともあるので、酸いも甘いも噛み分けた思いやりのある人物だと思われた。私たちは徹底的に考えた末、有罪を認めることが最善策だという結論に至った。この目論見を知っている人はごくわずかで、ロープとレオポルド、彼らの両親と二、三の親戚、それ

に弁護士だけだった。大勢の傍聴人は開廷を今か今かと待っていた。私は立ち上がり、慎重に慎重を重ねて準備した短い言葉で、本件に関しては公正な裁判を受けたいという懸念を述べ、そして「諸事情を鑑み、我々は殺人と誘拐のどちらの件につきましても、有罪を認めることにいたしました」と語った。

もちろん、州の検察局やその他の人も不意を衝かれて驚いていた。私たちの申し立ては受け入れられ、反論もなくその場で認められた。私たちが最も恐れていたのは、検察側が私たちの計画に気づいて、案件を一つずつ持ち出してくることだった。そうなると、たとえ最初の件で終身刑になっても、二番目の案件では反動で死刑となってしまうだろう。私たちはこうした危険を承知していたので、何としても二度に分けず一挙に方を付けるつもりだった。

有罪の申し立てが認められると、レポーターたちは大急ぎでドアから出て行き、このニュースを伝えた。しかし傍聴人はしばらく時間がたってからその意味を理解し、そして非常に驚いた。ようやく法廷内の驚愕の声がおさまり、人々は静かに席について次の動きを待った。検察局は私たちの打つ手を予期していなかったので、翌日まで続行を延期することが許可された。

事件の審理に数週間かかり、裁判官が熟考して意見を準備するためにもさらに時間がかかったが、この間ほどあわただしく過ごしたことはなかった。昼間、休憩する時間はほとんどなく、夜に眠る時間もあまりなかった。もちろん、新聞には毎日長い記事が掲載された。審理にはアメリカの全主要都市と全新聞社から40人ほどの記者が顔を出した。裁判の成り行きは国内のどの村でも一面記事となり、世界各地でも見守られていた。騒然としていたあの当時、私は事務所には滅多に行かなかった。束になって届く手紙も、ほとんど読まなかった。それらはたいがい残忍な嫌がらせの手紙だったからだ。

世間の人は、二人の少年を弁護することは犯罪だと考えているようだった。しかし裁判の結果、死刑になるかもしれない被告なら誰でもそうだが、少年たちは弁護を必要としていた。被告と弁護団に対する最も愚かで不合理な批判は、事件の審理に時間をかけすぎだというものだ。こんな裁判は他所ではありえない、とよく言われたけれど、訴訟手続きは全て型通りであって、どの州でも、あるいは法廷が量刑を定める権利を持つどの国であっても、同様に経過しただろう。確かに弁護士や証人に与えられる時間は多かれ少なかれ法廷が加減できるが、手続きは法律によって定められており、完全に型通りで通常のものであった。

有罪を認めたのだから、検察局が殺害の詳細を示すことは許されないと弁護側は抗議したが、検察側は被告たちの精神状態ひいては量刑判断に関わるので、それを示す権利があると主張した。余計な時間がかかったとしたら、それはすべて検察局のせいである。私たちはこの件に関して何の証拠も提出しなかったのに対し、検察官は殺害の事細かな証拠と証言を何もかも持ち出したからである。私たちは検察側証人に対して反対尋問はしなかった。

裁判は何週間もダラダラと続いた。法廷や廊下や外の通りはいつも、裁判の様子を見に来た人でごった返していた。法廷だけでなく、この事件に関係するすべての人や物は、出入りに際して厳重な警備を受けた。私たちは昼間は法廷で精力的に奮闘し、夕方と夜は相

談と議論に当てた。

検察官たちが希望していた時間を使い尽くしてから、私たちは十人から十五人の証人を立てた。それは主に二人の少年の学友で、二人の奇妙な行動を証言し、二人とも普通ではないと思っていると語った。中には私たちの願いに反して、二人は気が狂っているとまで言うてしまう者もいた。それから私たちは依頼した精神鑑定医を呼び、彼らは少年たちの精神状態に関する見解を述べた。両名とも情緒がひどく欠落しており、それは科学的テストで示されていたのである。

若者であれ老人であれ、異常な行動を犯さずに済むためには、情緒の役割がきわめて重要である。まともな情緒の持ち主は、慣習や法律や正常な感覚によってきつく禁じられている行為を考えると、すぐ自動的に気分が悪くなる。そのような不快感は、神経構造に欠陥のある者には起こらない。二人の少年、とりわけローブは、普通なら幼児が抱く空想を青年期まで引きずっていた。彼は幼い時から推理小説を読んで研究し、子供のときからアマチュアの探偵として色々試していた。ローブが読む小説では、探偵がいつもヒーローだった。彼は実在の探偵や警察を永久に当惑させるような完全犯罪を実行できると考え、この夢を何年も温め続けていたのである。ロバート・フランクスは殺害が大々的に報道されると、ローブは刑事と一緒にあちこち訪ねては、事件の経緯や犯人像に関する自分の考えを語っていた。彼の仮説は、その後すっかり解明された事実に近かった。ローブは関連記事が載っている新聞は何でも全て買い込み、話すことと言えば事件のことばかりだった。彼は初期の記事ではフランクスは失踪後の朝、エングルウッドのどこからか電話のメッセージが送られたと書かれていたことを挙げて、何か手がかりを得るため、なぜエングルウッドの電話ボックスをしらみつぶしに当たらないのかと、刑事に尋ねた。刑事たちはその助言に従ったが、実はローブ自身が電話をかけていたことが判明した。彼は家族にも絶え間なく事件のことを話し、事件に関する自分の仮説を披露した。ローブもレオポルドもともに初期のパラノイアだった。正常な精神をもった普通の人間が、あのような殺人を犯すきっかけとなるような動機は、どこを探しても全く見つからなかった。

世間の人々の理解力は、精神異常に対する態度が如実に示している。生け贄を求めるとき、彼らは事実や理論、医師や弁護士や科学者が邪魔するのを望まない。「民衆」と呼ばれるものが知っているのは、ただ願望充実だけなのである。「民衆」はまた、「やらなくちゃいけないなら、さっさとやるのがいい」とも感じている。考える時間なら、裁判の混乱が終わって生贄が死んでからたっぷりあるし、「その方がいい」というわけだ。なぜなら、裁判にかけられている人が精神異常か否かは関係ないと、一般には信じられているからだ。そんな奴は何の役にも立たないから、殺してしまっても構わないと言うのである。

こうした浅はかな考えの中にも、真実はあるかもしれない。明らかに世の中の十中八九の人については、それなりの理由で、「何の役にも立たないから、殺してしまっても構わない」と言えるだろう。誰であれ、その人について周囲の意見を聞けば、このように言い出す人がいるに違いない。人間はそもそも世の中で何らかの価値を持つことが必要なのだろうか。生きることを正当化するのは、あなたが生きていて、死にたくないと思っているということだ。もしこれだけでは不十分なら、生きることの正当化など不可能である。世

の中で何の価値も持たない人間は処刑してよいなどと公言できるようになれば、非常に危険だろう。人間が持つ価値が公正に判断されたなら、このような考えを支持する人たちの大方は価値なしとされ、したがって有罪となってしまっただろう。

刑事事件で弁護に利用すると嘲笑されるほど、精神異常は稀だろうか。刑務所よりも、精神異常者のための施設の方が多くの人を収容している。精神病院の多数の患者がさらに増加しているだけでなく、家族や友人が面倒をみている精神異常者も随分存在しており、彼らの状態は公の目からは注意深く隠されている。またもっと多くの数の人々が様々な程度の知的障害を持っており、どのような理論に基づいても、彼らは自分の行為に責任を負えない。誰であれ、精神異常や知的障害を持つ可能性の方が、犯罪者になる可能性より高い。犯罪への傾向を持つ人々の大半は、本当の症状を全く示さずに人生を送るが、いつ何時ちょっとしたきっかけでそれが現われなとも限らない。その点で犯罪者も精神異常者も、よく似ているのである。わが国の大きな刑務所では時折、専門家の検査の結果、精神的不安定と判断された多くの囚人が集められ、精神病院へ送られている。

ある人が精神的欠陥を抱えていることを示す最も明瞭な証拠の一つは、その人の行為の因果関係がきちんと意識されていないことである。ローブとレオポルドの場合、通常の間人ならあるはずの行動の動機が欠けている。二人は不運な少年に対して悪意も憎しみも持たず、嫌ってさえいなかった。この愚かな企みには、金を得るためという動機もなかった。彼らの犯行全体が子供じみて馬鹿げており、それだけでもう精神の決定的な異常を証明している。

以上の点に加えて、有罪を認めた二人の未成年の少年に死刑判決を宣告することは、110年に及ぶイリノイ州の歴史におけるあらゆる先例に反する。あの時までにはイリノイ州においてローブとレオポルドの年齢で死刑に処されたのは二人だけで、しかもこの二人にしても、もし有罪を認めていたなら終身刑になっていたであろう。しかし陪審員が死刑を決定し、裁判官はそれに干渉するのを拒んだのである。何歳であれ、有罪を認めた被告が死刑判決を受けることは非常に稀である。イリノイ州では殺人犯のごく一部だけが死刑になっている。これは、陪審員が刑罰を決める北部州のほとんどに当てはまることである。

これらの事実を鑑みると、有罪を認めた17歳と18歳の少年を、動機なき無意味な行動ゆえに処刑していたなら、合理性がなく弁解もできなかつただろう。死刑判決を出せば、法廷の外の集団ヒステリーに応じたことになっていたであろう。ケイヴァリー裁判官は、ローブとレオポルドの命を助けざるを得なかった。さもなければ、州のあらゆる前例に違背してしまっていた。外圧に屈するようなことがなければ、イリノイ州では異例の死刑判決は下せなかつたのである。

この事件の終盤ほど、シカゴの刑事裁判所に傍聴を求める人が押し寄せたことはなかつた。群衆が廷吏を押しつけて法廷内に入ろうと必死になり、互いにぶつかりあうことすらあった。

ここで議論を行なうことはできないが、最終弁論では事件に関する事実を率直に分かりやすく述べようと努めた。私は長年にわたり心理学の発展を克明に追ってきたので、人を動かす動機に関する最新の知見を応用したつもりだ。公判日二日間の大半を費やした最終

弁論は、シカゴの新聞にはほとんど一語一語そのまま載り、シカゴ以外の新聞でも大々的に掲載された。そのため人々は当時、事件に関する事実に通じ、結末ももちろん熟知していた。最終弁論を終えたとき、私は出せる限りの力を出し切っていた。あの日以後、あれほど続いたストレスに耐えたことはないし、やろうと思っても二度とできないだろう。

弁論が終了すると、ケイヴァリー裁判官は休廷し、事件について熟考して意見をまとめた。3週間後、彼は私たち全員に準備ができたと連絡してきた。被告の関係者は全員、警察に保護されながら裁判所に赴いた。ケイヴァリー裁判官が席に着いていた。部屋の中だけでなく、法廷内の悲壮な場面に近づこうとする人々で廊下や階段、外の通りまでぎゅうぎゅう詰めだった。ケイヴァリー裁判官はひどく感銘を受けているようだった。満員の部屋は死んだように静かになり、誰もが耳を澄ませた。最後の言葉が来るまで、どんな結末になるか予想がつかなかった。ついに判決が明らかになると、男も女もてんやわんやになって扉へ突進した。私たち被告関係者は誰もいなくなるのを待ってから、急いで通りに出て車に乗り、さっさと走り去った。ようやく、けりが付いた。ローブとレオポルドの命は救われた。しかし二人の目の前には、死ぬまで窓のない硬い石壁しかないのである。
〔その後、ローブは1936年に刑務所内で殺されてしまったが、レオポルドはすっかり更生して1958年に釈放され、熱心に宗教活動を続けた。〕